

特集①「歴史と地理をつなぐ1」

はじめに

長谷川 直子

本誌のタイトルは「歴史と地理」、現行の高校教員免許は「地理歴史」、このように地理と歴史はセットになることが多く、それは両分野の親和性の表れともいえる。

歴史と地理はどういう関係にあるのだろうか。それぞれ一言でいい表すと、歴史は「どのような（時間的）流れの中でそういうことになったのか」に注目しており、地理は「なぜその地域がそのような特徴を持つのか」に注目していると考えられる。筆者の歴史観は素人同然のため誤解があればご容赦願いたい。いい換えると、時間に着目する歴史学と地域（空間）に着目する地理学、ということになるのかもしれない。

時間と空間というと、全く別の視点からのアプローチのようにも思えるが、考えてみると両者はとても密接な（あるいは不可分な）関係にある。例えば地理学において「なぜその地域がそのような特徴を持つのか」を考える上で、歴史的な視点は必要不可欠である。なぜならその地域はさまざまな経緯を経て現在ある特徴を持つに至っているため、その地域の過去の歴史を踏まえる

必要がある。一方、歴史イベントを考える際にも、「なぜある場所でその歴史イベントが起こったのか？」を考える上で、そのイベントが起こった場所の特殊性が関係することも多くある。歴史イベントは人間によって引き起こされるものが多いと思われるが、そのイベントは必ずどこかの「場」で起こり、その「場」は特有の地域性を持っている。このイベントの起こる要因は個人の資質だけでなく、その人が生きた・影響を受けた場所や環境の特徴がその人の行為にも影響を与えていると解釈することができるケースがある。例えば、城や神社が造られる場所は地形と関係が深い、などといった例が挙げられる。

ところで、筆者は地理を専門としているが、高校生の時すでに歴史が苦手であった。統計をとったわけではないのであくまで筆者の主観にすぎないが、周囲の人の話を聞くと、地理好きの人は歴史を苦手とし、歴史好きの人は地理を苦手としているケースが多いようにみえる（稀にどちらも好きという人もいる）。筆者が歴史嫌いだった理由

は年号などの暗記が苦手だったためであるが、テレビなどで流れる歴史番組は好きである。今考えると、暗記を強要されなければ（試験などなければ）歴史を苦手にならなかったのではないかと思う。歴史の先生で地理が苦手な方がおられるとしたら、おそらく、自然（物理的側面）の理解が苦手とか、地名や場所の暗記が苦手ということになるのではないかと想像する。これらは学校での教育、ひいては筆者も関わる大学関係の入試制度の問題も大きいと思われる。

2022年に高校の地理歴史科の学習内容の扱い方や授業のあり方が大きく変わる予定である。地理が必修化されると、歴史の先生が地理科目を担当する可能性が多くあるという状況が予想される。そのような状況のなか、歴史と地理は時間と空間という異なるアプローチではあるものの、決して分断された分野ではなく、重なり合う、あるいは相互に補い合える部分があるということ、歴史の先生方とも共有したいと思い、今回の特集「歴史と地理をつなぐ」を企画した。この特集では、地理を専門とする著者陣が、地理を専門としない方にもわかりやすい文章を心がけて、歴史と地理の接点を幾つか紹介している。

地理と歴史の接点はいろいろあると思うが、今回の特集では以下の4稿を取り上げた。前者2本（以下の①・②）

では研究レベルでの接点、後者2本（以下の③・④）では実践レベルでの接点（協働）に大きく分けられる。①大都市が放棄された（遷都した）理由について、歴史学の分野でさまざまな議論がされてきた。宇根はこの都市の詳細な地図を作成しそこから読み取った情報を元に、水利施設が機能しなくなったことが遷都の理由として考えられることを紹介する。地理学の成果が歴史イベントの解釈に貢献できる例といえる。②自然地理学では現象を測定して数値データを得ることが多いが、機器の存在しない過去にはそのようなデータが十分存在しないため、過去の自然環境を知るためにさまざまな歴史記録が利用されている。平野は歴史気候学という過去の気候を扱う分野を例に、江戸時代（気象測器がまだなかった時代）の日記の記録から、当時の気候を知る例を紹介する。歴史学で用いられることの多いデータを、地理学の研究にも活かすことができる例といえる。③考古学という分野は特定の地域にある遺跡などから過去の事象を読み取るという点で、分野そのものが歴史と地理の融合といえる。早川は博物館などで遺跡を解説・展示する際の、地理・地図の手法を活用したアウトリーチの例を紹介する。調査からアウトリーチまでの諸段階での、歴史と地理の協働の有効性を示した例といえる。④市史や郷土史は、ある特定の地域の特徴や

これまでの歴史を総まとめしたもので、そのなかには自然環境から人間生活の歴史まですべての事柄が網羅される。そのため、これらの郷土史を作る際には歴史と地理のそれぞれの専門家の協力が欠かせない。石毛はこの協働の例を紹介する。ある地域を総合的に記述するうえで、歴史と地理が協働することの有効性を示した例といえる。

「地理は苦手」と思われている歴史の先生がもしおられるならば、これらの論文で紹介する接点を知っていただくことにより、地理を少しでも身近に感じてもらえたら幸いに思う。また本特集は地理からの紹介であるが、同様に、歴史の先生からみた、地理との接点もきっと存在するのだろうと思う。これは歴史の先生方からの情報をお待ちしたいと思っている。今回の特集が、歴史と地理の相互理解や交流をより活発にする何かのきっかけになればと願っている。

(はせがわ なおこ／

お茶の水女子大学准教授)

※本特集は次号（2018年4月号）でも「歴史と地理をつなぐ2（歴史の先生からみた地理）（仮）」として掲載予定です。